

## 神戸にもボタンウキクサ

角野康郎

2年前の1993年11月3日、神戸市西区伊川谷町小寺のため池を調査中、ボタンウキクサの小さな個体がいくつも浮かんでいることに気付いた。いずれも成長は悪く径2~3cm以下であったと記憶する。まもなく冬になれば、消滅するだろうと思いついておいた。

ところが昨年夏に同じ池を訪れたところ、ボタンウキクサの群落が広がり、ヒシヤトチカガミを押し退けて優占種になっていた。予想を裏切って現地で冬を越したものと思われる。10月30日には、さらに群落が広がり(写真1)、その株の巨大さに驚いた。ロゼットの直径が30cmを超えるのはざらで、最大38cmのものを採集して標本にした(写真2)。1枚の葉の最大は長さ22cm、幅10cmであり、秋遅いにもかかわらずたいへんよく花が咲い



(上) 写真1. ボタンウキクサの群落(神戸市西区伊川谷町, 1994年10月30日)

(下) 写真2. 径30cmを超えるボタンウキクサ. 中央のカメラは幅約15cm.

ていた。

この池は、富栄養化の進んだ池ではあるが、本州でここまで成長するというのはいきなり思わなかったことであり、また夏から秋遅くまでたいへんよく開花するというのも私にとっては新たな発見であった。

ボタンウキクサの逸出は近畿地方の他の場所でも情報を聞いた。西日本では、ここ2、3年の間に急速に広がっている様子なので、今後の動向を注目する必要がある。

○小宮定志著『食虫植物 その不思議を探る』(食研事業出版発行, 1994年11月, 106P, 頒価2,300円)

欧米では食虫植物に関する立派な本が何冊も出ている。進化論で有名なダーウィンの“*Insectivorous Plants*”は、今読んでいろいろな示唆を受ける名著であるし(今もリプリント版が手に入る)、そのほかに何冊も食虫植物の生物学を扱った本が出版されている。国内でも食虫植物に関する本は少なくないが、種類の紹介や栽培方法を主としたものがほとんどであり、食虫植物の生態を扱ったにしても、入門的な内容にとどまっていた。

本書は、紙面の都合で簡略化せざるを得なかったというものの、類書にはない多彩で本格的な内容を持っている。簡単な研究史に始まり、「生態」、「捕虫方法」、「進化」とさまざまな例を引きながら最新の知見と著者の考えが述べられる。モノクロではあるが多くの興味深い写真や図が挿入されているのでわかりやすい。最後の章は、栽培と植物の入手方法にあてられる。付録として、分布図、分類表、種名(学名)一覧、出版物紹介、おもな食虫植物取り扱い業者の一覧などがある。

日本でもようやくひとつの食虫植物論が出たと評価できるだろう。なお、本書の入手は〒102 東京都千代田区富士見1-9-20 日本歯科大学生物学教室内 食虫植物研究会(郵便振替口座 00130-9-117684)へ申し込まれるとよい。(角野康郎)